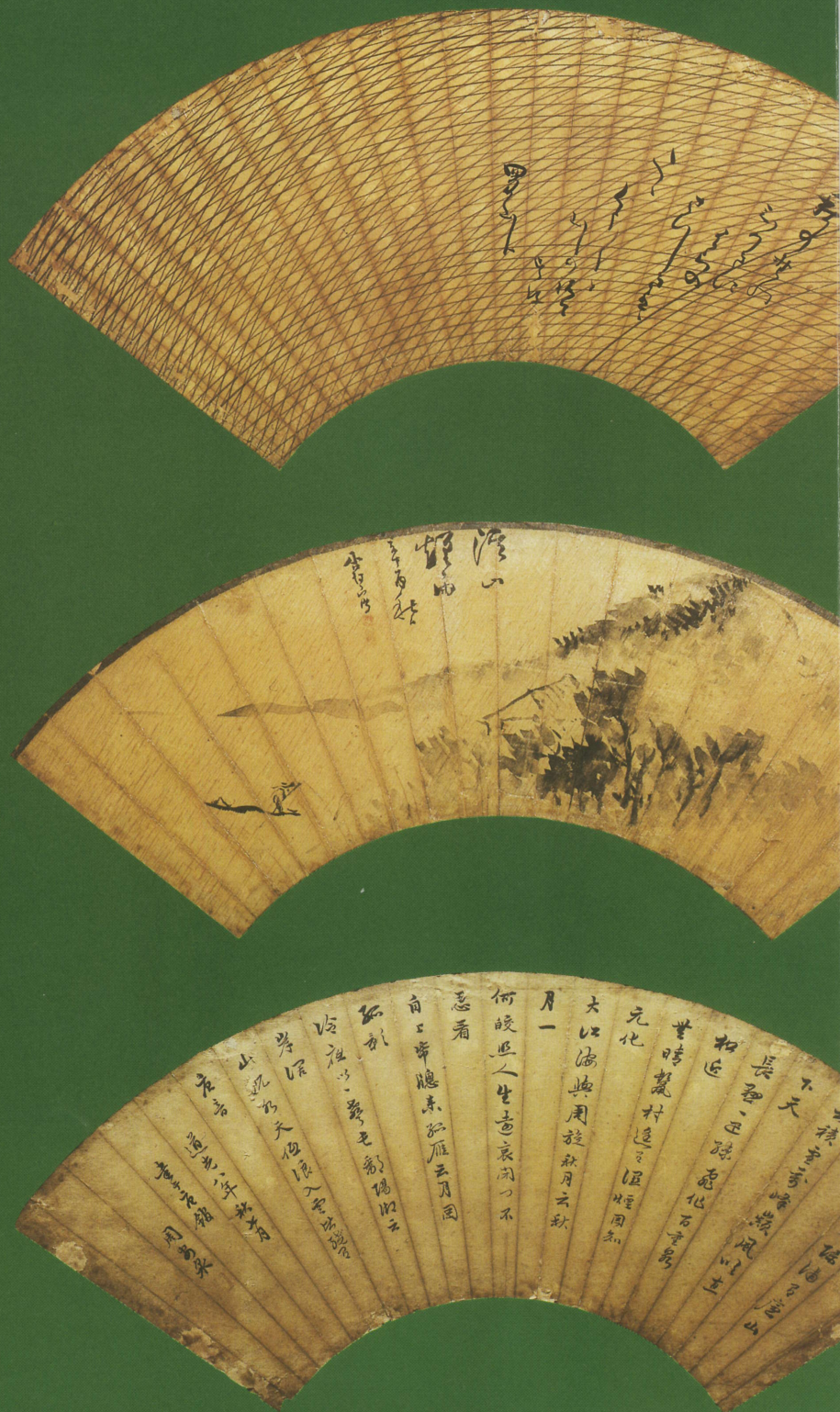


調度品展

新居関所史料館企画展

飯田武兵衛本陣

新居宿



平成11年7月20日(火)～9月5日(日)

新居関所史料館

新居関所史料館企画展

新居宿飯田武兵衛本陣調度品展

■開催にあたって

本陣とは、江戸時代において、参勤交代の大名をはじめ宮家や公家、高僧、幕府要人その他の特権階級の人々の休憩・休泊に使われた施設で、街道筋の各宿場には一軒〜六軒設けられました。一般庶民がもっぱら利用した旅籠と違い、高級旅館といえるでしょう。

したがって、各地の本陣には書画、什器類の調度品や身分の高い利用者からの拝領品等、いずれも当時の技術の粋を集めた一級品ばかり揃っていました。

今回開催する新居宿飯田武兵衛本陣調度品展では、飯田家が所蔵している資料の一部を展示し、江戸時代における宿場の本陣の役割や実態の一端を探ってみることにしました。

本展の開催にあたり、貴重な資料の出品を快諾していただいた飯田家当主飯田純男氏に厚く御礼申し上げます。

平成十一年七月

新居関所史料館



現在の飯田武兵衛本陣・左側の二階建て(明治30年代に建てられた元郵便局舎)のところに門と玄関があった

宿場の本陣

本陣の役割 東海道をはじめとする街道筋における休泊施設には、本陣、脇本陣、旅籠、茶屋などがあり、それらの中で本陣は、将軍上洛用の御殿は別格として、最高級の施設とされた。参勤交代の大名を筆頭に、宮家、公家、高僧や幕府要人などの特権階級者の休泊にあてられた各宿場内の最も大規模な施設であった。特に、公家、大名などの宿泊時には、全宿役人が本陣に集まり、案内、膳立てから宿内の警戒までの役割を担った。

一方、本陣は、藩主に対する年頭儀礼の際も庄屋、問屋などの宿役人の上位にあり、宿内統轄者の立場にもあった。同時に、中央・各地のいわゆる「文化人」との接触も多く、住民に先行して自らの教養を高めて文化的交流も広めた。また、本陣は概して宿場の中心に位置し、広大な敷地、庭園を有していたため、さまざまな交流の場にもなった。

本陣経営の実態 大規模経営を維持するためには、旅籠に比し、多額な出費を余儀なくされ、常に利用者の拡大、獲得に努めねばならなかった。一定収入は確保されていたが、人件費等がかさみ、江戸中期以降はどこも経営内容は苦しかった。

本陣の発祥・概要 本陣が各宿場に本格的に整備されたのは、一般に寛永十二年（一六三六）参勤交代が制度的に始まったことに起因するといわれる。資料によれば、江戸中期では東海道五十三次の宿場では一〇九軒の本陣があり、旅籠の数は二、九五二軒にものぼった。平均すれば一つの宿場で本陣二軒、旅籠五五軒が標準。本陣敷地はおおよそ三〇〇坪前後であり、門構え・玄関付きで建坪は二〇〇坪ほどだった。

新居宿飯田武兵衛本陣 飯田家は、過去帳によれば同家初代井口一学は信濃国諏訪神社の神官を務め、のち飯田に改姓、嘉通（源左衛門）の代に、徳川家康浜松移封に際し今切（浜名湖口）渡船を案内したことにより「家康判物」を受け、それを縁に将軍上洛や名代通行の際に御座船の舳乗りを務めた。

新居宿に三軒あった本陣の一つとして小浜藩、佐倉藩、桑名藩等六九家の大名の出入りがあり、屋敷地は一反二三歩（三〇間×一〇間四尺七寸）約三〇〇坪、建坪は一九六坪に及んだ。立ち寄った人では国学者の平田篤胤、鈴木重胤、公家の三條家、幕末の志士、侠客、明治初期の政治家などがおり、これらの人ゆかりの遺品、拝領品、挿話も残っている。明治元年（一八六八）明治天皇行幸の際の行在所ともなった。

一方、飯田家は本陣職にとどまらず、一時は庄屋や問屋職を務めたり、「本陣塾」を開塾し、文人の交流や宿内子女の教育の場となった。幕末期の当主飯田昌秀・温徳父子の学識・素養は近隣に聞こえた。

また、新居宿には関所が置かれていた関係で、ほかの宿場に見られない仕事を本陣は請け負った。東海道を往来する女性は関所構内で調べを受けるのが通例であったが、身分の高い女性に対しては関所役人が本陣へ出向き、本陣の妻母を通じて調べを行う「本陣改め」という制度があった。この任務遂行を約すため新居宿の本陣とその妻母は定期的に関所へ願い出て、庄屋・問屋立ち会いのもと血判・爪印の誓詞を提出した。本陣にとって神文を書くことは名誉という考えがあり、そのつど関所へ礼物を届けるしきりであった。飯田本陣が幅広い役割を果たしていたことがうかがわれる。



貝合わせ (かいあわせ)

平安時代の発祥と言われ、一対の貝に和歌の上の句・下の句や名所図をかい合わせて遊んだもの。江戸時代には大奥の遊びとなり、輿入れの際に花嫁道具の一つとして扱われた。町人でも真似る者がいた。貝は蛤(はまぐり)が多かった。飯田家所蔵のものは公家が宮家からの拝領品と思われる。



膳碗 (ぜんわん)

本陣利用者をもてなした黒漆塗りの膳碗。日に三度食事する習慣は江戸後期に確立したが、そのころから庶民でも本膳と呼ばれる饗応があり、もてなす側ともてなされる側の礼儀が浸透した。

茶壺 (ちゃつぽ)

茶壺にかかわる行事としては、徳川將軍家用の茶を運んだ茶壺道中が知られるが、朝廷にも運んだという。古信楽焼や越前焼が多く、主に葉茶壺として使用された。飯田本陣では本陣利用客用に使った。



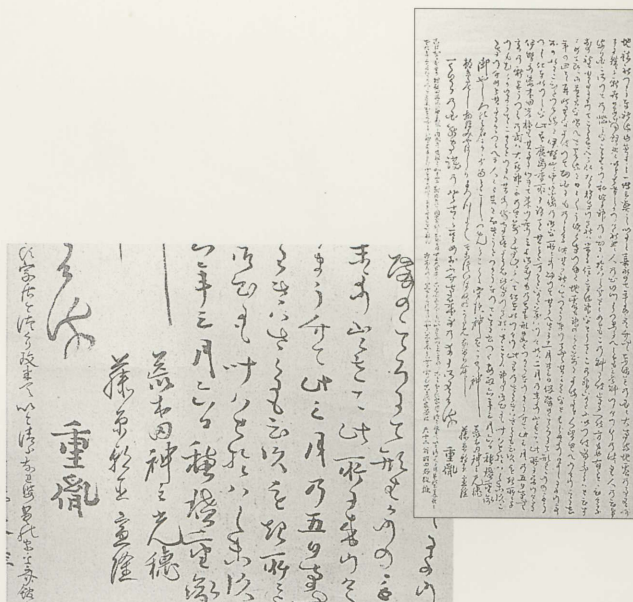


印籠 (いんろう)

江戸期の工芸品の中でも際だって「粋」を感じさせる道具。もともとは中国から伝来したもので、文字どおり印と朱肉を入れていた。それが薬籠となり、武士や町人の正装に必要なものとなった。

蒔絵文箱 (まきえふばこ)

漆で文様を描き、金銀錫粉、色粉等を蒔き付け、書状、書簡を入れた。蒔絵は平安期に技法が確立したといわれ、江戸期には京都のほか江戸、金沢で盛んであった。



鈴木重胤墨跡 (すずきしげたねぼくせき)

鈴木重胤(1812—1863)は幕末の国学者。本居宣長の学風を慕い宣長の孫弟子に入門、平田篤胤にも師事した。「祝詞講義」「日本書紀伝」を著したが暗殺された。飯田本陣には三度立ち寄った。嘉永7年(1854)、新居への途次、上ノ原(湖西市)付近で嘉永の大地震(安政東海地震)に遭った経験から、新居に地鎮社(とこしずめしゃ)を勧請した。出品品はこの顛末を記したもの。



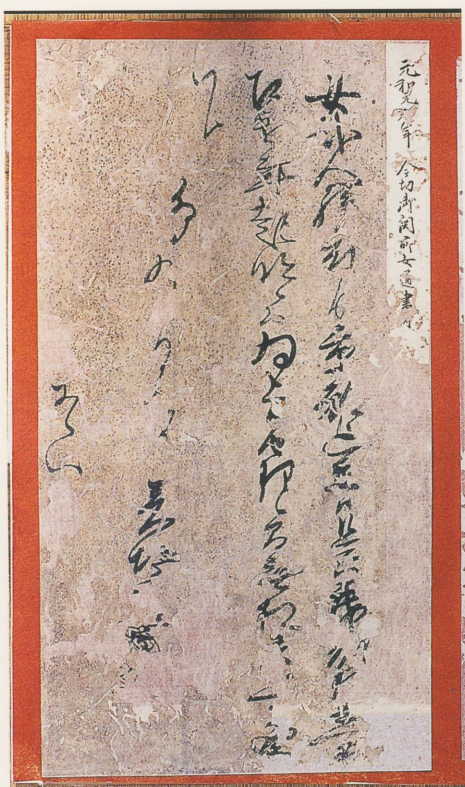
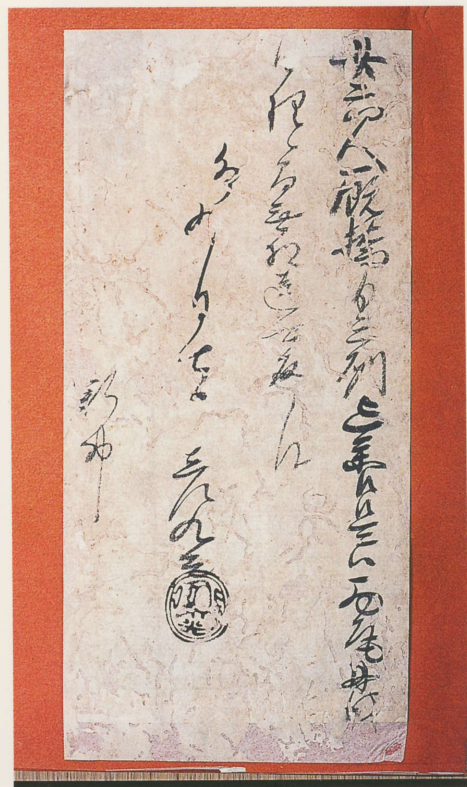
火鉢 (ひばち)

黒漆塗りで利用者に供した。江戸期の書物に、火鉢は「秋は九月節供頃より春は三月末の頃まで寒暖に賄ひ見計ひ出すべし」とある。



葵紋入り盃 (あおいもんいりさかずき)

盃には木製、漆塗り、陶製等があるが、江戸中期には漆塗りよりも陶製が流行し、小形のものが多かった。これは、徳川家ゆかりの地・三河岡崎の寺から幕末の安政4年(1857)に贈られたもの。



女六人厩橋より三州迄参候是ハ西尾丹波
御理候間無相違可通候以上

卯九月七日 彦九兵衛(印)

新井

現存する国内最古の 関所通行手形

女式人駿府より京都迄参候是ハ□□□□

召遣年起明候而為上候由理候間無相違可通
候以上

卯九月□□日 彦坂□□□□(印)

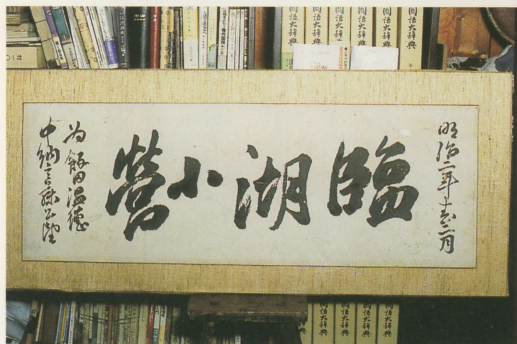
あらい

右は、厩橋(今の群馬県前橋市)から三河国(愛知県)まで向かう女性六人の関所通行手形、左は駿府(静岡市)から京都に上る二人の女性の通行手形。二通とも差出人は彦坂九兵衛光政で、新居関所宛てとなっている。

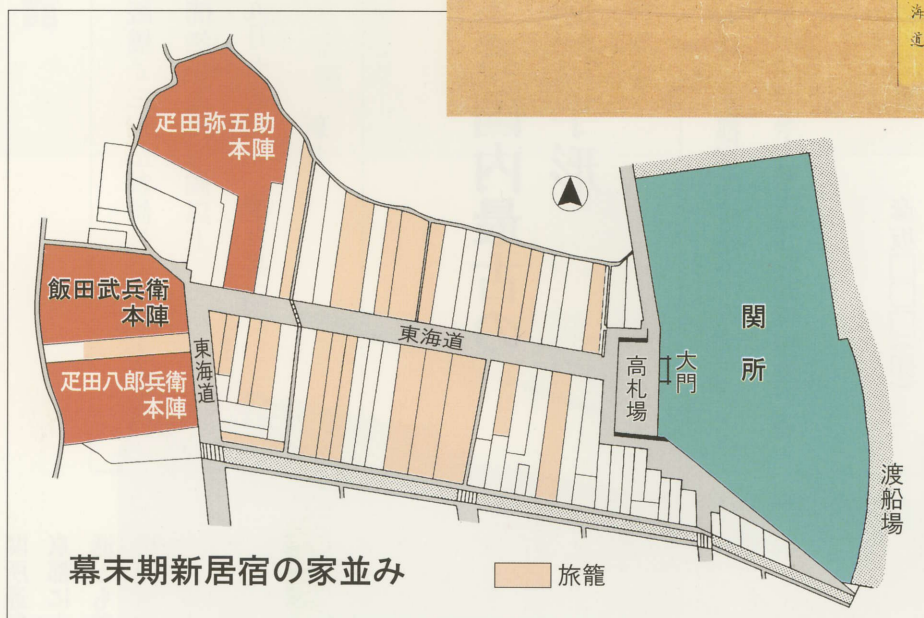
彦坂光政は家康の家臣本多広孝に仕え、三河の代官などを務めた。家康の駿府政権下において、慶長十四年(一六〇九)から駿府町奉行及び代官として遠江・駿河支配に携わった。元和二年(一六一六)、家康が死去すると、その遺命により徳川頼宣の臣となった。徳川頼宣は家康の十男で、慶長十四年から駿河・遠江地方を領有、元和五年、紀伊(和歌山県)へ転封するが、このとき彦坂光政も同行した。

手形は、二通とも年号は書かれていないが「卯」とあり、光政の活躍した時期から元和元年(一六一五)発行のものであることがわかる。

現存する江戸時代の関所通行手形としては、これまで中山道木曾福島関所宛ての元和七年(一六二二)のものが最古とされてきたが、飯田本陣から先ごろ発見されたこの二通はそれより古い。徳川政権下の関所制度は元和寛政期に確立されたといわれ、その初期のころの様子を知る資料として意義深い。



武兵衛本陣には文人や政治家の客も多かった
江戸後期の戯作者蜀山人太田南畝の書(上)と
武兵衛本陣最後の当主飯田温徳が明治の元勳
西園寺公望から贈られた書(下)



飯田武兵衛本陣の
平面図

新居宿の本陣と旅籠

江戸時代を通じて新居宿には「飯田武兵衛」、「足田弥五助」、「足田八郎兵衛」と、本陣が三軒、旅籠が二二〇三二軒あった。旅籠の数からみると東海道五十三次のなかで中規模の宿場であった。浜松、吉田（豊橋）という大きくてにぎやかな宿場の中間にあつたこと、関所の存在が煙たがられたことなどから、素通りしたり休憩程度に利用したりする旅人が少なくなかったと思われる。（五十三宿中、本陣が最も多かったのは箱根、浜松の六軒、旅籠では宮の二四八軒。）

経済が行き詰まりをみた江戸時代後期には、新居宿の本陣、旅籠の経営も厳しくなった。天保年間には、三軒の本陣がそろって吉田藩に助成金を願ひ出たり、客の取り合いをめぐって本陣・旅籠の間で紛争が起き、幕府の調停にまでもつれ込んでようやく解決をみたりしている。